

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名：磯野富美子

本研究は、これまでの調査では十分に把握されていなかった産業看護職の業務をめぐる問題点や看護職自身の役割認識を明らかにしようと試みたものである。具体的には、看護職が不満を感じているにもかかわらずほとんど把握されてこなかった事務的業務の実態や、実際の業務にどのような要因が影響しているのか、また、業務を検討するうえで不可欠の看護職自身の役割に対する認識を明らかにするとともに、産業看護職がかかえている問題の根底にある彼女らの業務に対する理想と現実の業務実態との食い違いを乖離と名づけ、その実態を実証的に把握しようと試みており、下記の結果を得ている。

- 1) 看護職の多くが関与している事務的業務は健康診断に付随した業務であった。また、看護職が関与する業務数は免許の種類や衛生管理者への選任の有無により異なっていた。
- 2) 看護職は専門業務に専念するとともに個人レベルではなく職場集団全体への関与を深めたいと希望している。一方、作業・環境分野に対する関心は低かった。
- 3) 事業所側の看護職に対する産業保健活動への関与の期待は、看護職が感じているよりは高かったが、看護職自身が認識するほどには高くなかった。また、看護職には事業所からの期待を低くとらえる傾向がみられた。
- 4) 自己が関与を必要と思う業務に看護職が関与していない状況(不全的乖離)は健康管理業務や健康診断業務で生じていた。また、関与を必要ないと思う業務に関与している状況(負担的乖離)は専門知識が不要である事務的業務で生じていた。乖離の背景要因は、事業所の規模であった。
- 5) モラールへの影響は不全的乖離のみでみられ、必要と思う業務に関与していない状況が看護職の仕事への意欲を低下させることが明らかになった。

以上、本論文は産業看護職の業務を検討する上で貴重な基礎資料となると同時に、看護職のみならず事業所の認識を同時にとらえたことによって、産業看護職の現実的な将来像を模索するうえで多くの示唆が得られたと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。